

(事例報告)

緘黙児の自己表現の変容に関する一考察

—母子分離不安への支援を通して—

伊 藤 由 美*・植木田 潤**

(*教育研修・事業部) (**宮城教育大学)

要旨：場面緘黙は話す能力にほぼ問題がないにもかかわらず、学校のように特定の社会的状況で話せないことが続く状態を言う。初回相談時小学4年生の女兒A子は、場面緘黙があり、母親と離れ学校に行くことが難しい状態であった。そこで、分離不安の軽減を目指し、A子との4年間にわたる教育相談を行った。面接は母子並行で行い、A子には開始時より愛着の安定を図るため、彼女の気持ちを推測して働きかけたり、言葉にしたりという関わりを続けた。経過の中で、A子と筆者の関係は次第に安定し、A子は遊びや交換ノートを通して徐々に自己表現をするようになっていった。同時に、A子は母親との愛着関係を安定させ、泣くことで表現していた混乱した感情を、言葉で伝えるようになっていった。また、一人で登校ができるようになったり、母親が働くことを認められたりという変化も見られた。相談を終える頃には、筆者のみならず、学校の先生や友だちに絵や文章を通した自己表現を楽しめるまでに成長した。

見出し語：教育相談、場面緘黙、分離不安、自己表現、愛着

I. はじめに

場面緘黙は、話す能力にほぼ問題がないにもかかわらず、学校のように特定の社会的状況で話せないことが続く状態を言う。その出現率は調査対象等により結果にばらつきはあるものの、日本では0.15%～0.5%以下と推定されており(矢澤, 2008), 2, 3歳～6歳と家庭外の集団に入るのを契機に発症するのが特徴とされている(角田, 2011; 相馬, 1991)。多くの場合、場面緘黙のある子どもは通常の学級に在籍し、ほぼ休むことなく登校するものの学習への参加は難しく、中には不登校に至る子どももいる(竹内, 1989)。このような状態について文部科学省(2012)は、緘黙ははっきりとした問題行動として表れるため気付かれやすいが、原因や背景は理解されにくい場合が少なくない問題として生徒指導提要の中に記している。また、不登校となる理由とし

て、学習参加の難しさと共に場面緘黙の状態からのいじめ等の二次的に派生する要因があることも指摘されている(大井・鈴木・玉木他, 1979)。

場面緘黙のある子どもが、安心できる雰囲気の中で指導が受けられる場として、学校教育においては自閉症・情緒障害特別支援学級や通級による指導(自閉症・情緒障害)がある。また、教室に入れない状態への支援の場として保健室や相談室が活用されることもある(安福・中角・田中他, 2009)。このように、特別な指導・支援の場が制度化されたり、活用されたりしている一方、教育関係者は場面緘黙を思春期以降に自然軽快すると思いがちであるという指摘もある(大村, 2006)。これは、場面緘黙は原因や背景が分かりにくく、状態像が変化してもその理由が分かりづらいことが大きな要因だと考えられる。しかしながら、スクールカウンセラーの配置が決して十分とはいえない状況(岩田・大芦・鎌原他, 2009)、支援・指導にあたっている教師に教育的支

援を超えた心理面への支援までを求めることの難しさ等が、卒後の環境変化や子ども自身の成長に自然軽快を期待せざるを得ない要因となっていることも考えられる。

一方、場面緘黙は社交恐怖、特定恐怖、分離不安等の併存が見られることが指摘されており、不安障害との強い関連が示されている（角田，2011）。また、相馬（1991）は場面緘黙の治療について「基本的な問題を、言葉の問題よりは、脆弱な自我を護る防衛反応や対人関係の障害と捉えて、緊張や不安感を解消し、安全で保護された空間を保障し、自発的な表現を促すことによって緘黙状態の解消から人格の変容を目指すアプローチがその大方の考え方」だと述べている。また、支援方法については、発症年齢の低さや発語の制限から、遊戯療法や箱庭療法、あるいはその併用という方法が選択されることが多く、さらに子どもと治療者との関係で中間的な距離をとれるようになることが治療の重要な課題との指摘がされている（相馬，1991）。不安の原因が特定できる状況や対象であれば、その原因が取り除かれることで緘黙の状態が軽減する可能性は高い。しかし、社会的な状況に置かれることそのものが不安を高め、緘黙の状態になる子どもの場合には、その根底にある課題についてできるだけ早期から支援を行い、より適応的に過ごせるよう情緒面での成長を促すことが大切ではないだろうか。

本稿で紹介する場面緘黙の状態を示す女兒（以下、A子と記す）の事例は、小学校のスクールカウンセラーから紹介を受け教育相談につながった事例である。教育相談は母子並行で実施し、母親面接を通して学校や家庭での様子を把握しながら、必要に応じ学校と連絡を取り合った。学校では朝、A子が連絡帳を持ってくるのを待っていたり、在籍学級以外にA子が過ごせる場を確保したり、負担にならない役割を与えたりと、学校がA子の居場所となるような支援と学習指導が続けられた。教育相談では、母親から聴取したA子の場面緘黙と不登校の状態、生育歴、家族関係等の情報、さらにA子の母子分離の様子やアセスメントの結果等から、分離不安とその背景にある愛着の不安定さの改善を目指すこととした。

4年間の面接期間にA子は母親からの分離に不安を示さなくなり、自立に向けて歩み始めた。また、交換ノートや漫画作成等を通して自己表現を楽しむようになる等の展開がみられた。このようなA子との教育相談の経過から、①A子にとって表現をすることの意味の変化と、②場面緘黙のある子どもへの不安の軽減を目指した支援の効果について検討したい。

Ⅱ．事例の概要

1．概要

- （1）主訴：場面緘黙、登校渋り
- （2）家族構成：父，母，姉（高校生），A子（小4）
- （3）生育歴・来談経緯：幼児期より引っ込み思案で、家族以外の人に話しかけられると緊張が強くなり、身体を固くし話せなくなってしまう。幼稚園では母子分離が難しく、登園渋りがあった。入学後は緊張しながらも通学をしていたが、3年生の時に担任教師に激しく叱責をされたことから登校前に緊張で腹痛を訴えたり、嘔吐したりするようになる。その後母親と一緒に登校し、2～3時間保健室で過ごして帰宅するような状態が続いたことから、スクールカウンセラーに研究所での相談を勧められた。

2．面接構造

- （1）面接時間：1回50分
- （2）面接頻度：相談開始当初は週1回（第1回～第95回）であったが、A子の変化に伴い、2週に1回（第96回～第103回）、月1回（第104回～第112回）と変更した。

初回面接ではHTP（The House-Tree-Person Test：「家」「樹木」「人物」描写検査）を実施し、SCT（sentence completion test：文章完成法）は自宅で記入してもらうよう依頼した。

- （3）面接構造：母子並行面接。A子は第一著者、母親は第二著者が担当した。また、年1回程度A子の学校での様子および面接経過でのトピックについて学級担任や養護教諭等と共有し、今後の方針について意見交換を行った。

Ⅲ. 事例の経過

4年に渡る112回の面接経過を、A子の自己表現の変化を軸に「自己表現の基盤づくりの期」、「文字を通した意思表示が始まった期」、「身近な人以外にも自己表現を始めた期」の3期に分けて報告する。A子との面接経過と母親面接で聴取したエピソードについては、表1として相談経過の最後に示す。なお、母親に向けた表現と登校の様子については、母親面接で聴取したもののうち、特記すべき内容を取り出して記した。

第1期：#1～#23「自己表現の基盤づくりの期」

初回面接のA子の様子はかなり緊張した状態で、挨拶をしてもチラッと相談担当者（以下、Th.と記す。）を見た後は視線を合わせない。心理アセスメントのために実施したHTPでは、指先が動かず紙がめくれないほど緊張していたが、絵を描くことに抵抗はないようだった（図1）。HTPの家屋画に書かれたクマのぬいぐるみについてたずねると、いつもそばにいた大切なぬいぐるみだという返事が小さ

な声で返ってきた。

2回目以降、このぬいぐるみを持参するようになる。シルバニアファミリー^{注1)}で学校を作り始めるが、中にクモがいるのを見つけると固くなる。Th.が学校の外へクモを追い出すと、何事もなかったかのように学校作りに戻る。次の回には手作りのお菓子を持参する。前回と同様、シルバニアファミリーの家を作ろうと何かを探している様子に＜何が欲しい？＞＜一緒に探すよ＞と何度か声を掛けるが、A子はTh.に伝えることなく黙々と何かを探し続けている。その様子にTh.はA子に取り残されたような感覚になる。一方、たくさんの質問が書かれたプロフィール帳をTh.に渡してきたり、飼い始めたインコの動画を見せたり、Th.への関心や共有したい気持ちがあることが伝わってくることもある。動画を見ながら、一言で応えられそうな質問をすると、A子は首を振ったり一語程度の言葉で返してきたりする。4回目からはゲームで遊び始め、種類を変えながらゲーム遊びが47回目まで続く。15回目には“とびだせどうぶつの森”^{注2)}というゲームの中で、友だちとロールプレイ遊びをしていることをポツンと話す。ゲームの話からTh.とコミュニケー



図1 HTP

注1) 動物の家族人形セットとドールハウスの玩具。人形が動物の形をしているため、家族や友だち等への感情を、距離を持って表現することが可能だと考えられた。

注2) 動物のキャラクターを通じ、架空の世界で友だちと会話をしたり、遊んだりできる通信ゲーム。自分が別のキャラクターになれること、現実の世界でないこと、一定の距離を保てること、という3つの条件の下でコミュニケーションが取れるため、A子には適切なツールだと思われた。

注3) バランスを取りながら不安定な台にコインを乗せ、バランスを崩したら負けになるゲーム。コインのバランスが崩れると、今まで積み上げていたものが突然ひっくり返るので、不測の事態への対応を確認することができた。“ジェンガ”や“黒ひげ危機一発”も同様の意味でA子の様子を確認できるものであった。

ションを取りたがっていることは伝わってくるものの、殆ど言葉を発しないA子に対しTh.はどのように関わればよいのかと悩んだ。16回目では、じっと座っているA子に＜何か別のことしたいのかな？＞ときくと“ジェンガ”や“黒ひげ危機一発”^{注3)}等のゲームを選んで持ってくるようになる。このエピソードから、Th.がA子の要求を推測して声を掛けることで、安心して活動できるのではないかと思われた。その後の20回目では、A子1人で“ゆらゆらパニック”^{注3)}を組み立てられない様子を見て＜一緒にやろうか＞とTh.が声を掛けて手伝う。2人で作業に取り組み、できあがると一緒に拍手をして喜ぶ。このエピソードがあったためか、終了時間になっても椅子に座ったまま動かず、初めておもちゃを片付けようとしないう様子が見られた。＜このままにしておきたいのかな？＞とたずねるとA子が“うん”とはっきり意思表示をしたため、今回はおもちゃを崩さない約束をした。この回の終了後から、A子は母親と再会すると2人で1つに見えるほどベッタリ寄り添う姿を見せるようになる。この回から24回目までは、面接室でゲームをして過ごし、母親に寄り添って帰って行く。第1期の後半は、自ら言葉に出さないA子の要求にTh.が気づき、推測し、要求を満たすという関わりが続いた。

第2期：#24～#61「文字を通した意思表示が始まった期」

25回目では、やり始めたゲームをすぐに終えなくてはならない状況に不満そうな表情を見せ、アンケートに“おもちゃが時間がなくてできなかった”と書いて帰る。26回目では、チェスに負け続けるA子に対し、Th.が手心を加えると、アンケートに“今回の相談はよくなかった。”と書く等、アンケートに感想を書いて帰っていくようになる。この次の回に、母親から、A子の誕生日プレゼントにチェスを買ってあげたことを知らされる。面接室の世界と家庭がつながっていると感じさせられる報告であった。アンケートへの記入が続いたことから、28回目にTh.から＜話そうと思ったけど話せなかったこととか、ゲームで負けて口惜しかったとか、ノートに書いてくれるといいなと思って＞と小さなノ

トを渡す。すると、29回目には早速、渡したノートに“とびだせどうぶつの森”のことを書いて持参する。この日から交換ノートが始まる。30回目にTh.が返事を書いて渡すと、A子はニコニコしながら読む。その日、チェスとリバーシで惨敗すると、アンケートに“負けた～”と大きな字で書いて帰っていく。アンケートには面接の感想、交換ノートには研究所以外の世界での出来事と、書く内容を使い分けているようであった。交換ノートを始めてからA子とTh.の間にあった緊張が徐々に和らぎ、A子の表情も柔らかくなっていくのが確認できた。33回目に遊んだチェスでは、最初から積極的にTh.のコマを取りに来たり、34回目では“ゆらゆらパニック”の上に載せていたコインをひっくり返すと、小さな声で「きゃっ」と声を出したり、今までと異なる様子が見られた。その後の38回目では「あっ！」「よかった」と思わず独り言が漏れる様子が見られた。チェスでTh.に逆転勝ちをした35回目では、アンケート用紙に大きな文字で“勝った～”と書き、39回目にリバーシとサッカーゲームをすると、“負けた～！でもサッカーでは勝った”と書いて帰って行く。45回目にチェスで引き分けになると、終了時間になってもサッカーゲームの前から動かない。＜どうしても勝ち負け決めたい気分なの？＞ときくと「うん」。Th.が提案した“どちらかが先に3回勝ったら終了する”というルールでゲームをするとA子は了解をする。Th.が勝って終了になると残念そうな表情になるが、すぐ片付けをして部屋を出る。笑いながらアンケートに“今日の相談はまあまあ”と評価して帰って行った。徐々に自分の考えや感情を示してくれるようになったA子の様子を見て、Th.は、自分の好きなものを紙の上に表現してみてもどうかと提案した。すると提案後の交換ノートに“絵とかおり紙でデザインしてみたいです”と返事があったため、48回目にノートや色鉛筆、雑誌の切り抜き等の用具を準備した。A子は家から“とびだせどうぶつの森”のキャラクターが載った本を持参し、キャラクターが着ている服を紙の上に再現していく。A子は一人で作業を進めていたが、Th.は第1期の時のようにA子に取り残されたような感覚にはならなかった。A子専用のノートを作り、49回目

からシールを使ったデザイン遊びが始まる。デザイン遊びでは、A子が作品を作るだけでなく、A子が作っている最中にTh.が質問をして、何を作っているのかを推測するためのヒントを求めたり、感想を伝えたりした。49回目では、ヒントを求めると「う～ん、小さいもの」＜小さい？どこにある？＞「すごく探せば家の中にあるかも」＜すごく探したら見つけれられるの？A子は家でみたことある？いつみた？＞「お正月」＜お正月に見るもので、小さくて、すごく探すとでてくるもの？・・・羽子板の羽根？＞「ちがう」＜何だろう・・・分かんない＞「サイコロ」＜サイコロかあ～。確かに小さいし、お正月にすごろくとかして使うね～＞と自然に会話が流れるようになっていた。アンケートには“今日はとても楽しかった。またやりた～い”と書かれていた。50回目は面接室に入るとすぐに“とびだせどうぶつの森”の本を見ながらシール絵を作り始める。できあがると「これは難しいかも」と言う。できあがった白い犬を指差して、担任の先生に似てると話す。＜どこが似てるの？＞「眉毛」＜眉毛が太いの？＞「うん」。最後は作品にキャラクターの名前を書く。この日、20回目からずっと母親にべったりと寄り添っていたA子が、母親から離れ2人で並んで帰って行った。51回目では時間が過ぎてもなかなか終わろうとしないA子の様子を見て、Th.から＜気になってることある？次でもよかったらノートに書いて教えて＞と伝えると、頷いて部屋を出る。アン

ケートに“すごくよかったです”と書いていた。次の交換ノートには相談事が書かれていた。また、お気に入りの漫画のキャラクターを使って物語を書いたことも報告された。62回目からは大好きな犬をシールで作りはじめ。できあがった犬に＜見たことはある気がするけど・・・どれくらいの大きさなの？＞ときくと「これくらいかな」と手で形を作り「中型犬」。＜名前は何文字？＞「・・・5文字」＜5文字かあ～・・・ジバンジーは？＞とTh.が言うと身体をねじって笑う。「でも、最後に伸ばすのは合ってる」＜ほんと！じゃ、〇〇〇〇ーなんだ＞と紙に書いて見せる。＜点々がついてる字はある？＞「う～ん、2つ」と首を傾げながら言う。＜何だろう・・・ババンジー？＞「おいしい」。Th.が降参すると「バセンジー」と教えてくれる。

第3期：#62～#112「身近な人以外にも自己表現を始めた期」

63回目は1ヶ月ぶりに交換ノートを持ってくる。ノートに“一緒にシール貼りをしたかった”と書いてあったため、Th.もシールを貼る。Th.は＜ここに貼ってもいい？＞と尋ねながらシールを貼るが、A子のイメージとは違ったようで、しばらく考えた後A子はTh.が貼ったシールを外し貼り直していく。アンケートに“今日は楽しかった！！”と書いていた。1ヶ月間交換ノートを持って来なかったのは、一緒にシール貼りをして楽しみたいが、期待

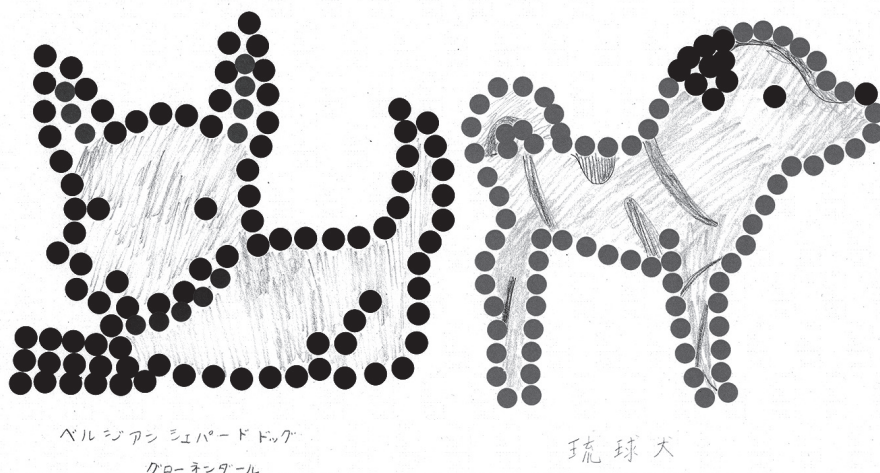


図2 デザイン遊びで作った犬

したようにTh.がシールを貼らなかったらどうしようか、貼り直したらTh.との関係が変わるのではないかと迷っていたためのように思われた。64回目はおえかきノートを開くが10分程膝の上に乗せたまま黙っている。A子が困っているように見え、Th.から「今日はひとりでやりたい気分なの?」ときくと「うん」。<じゃ、見てていい?>ときくとすぐにシールを貼りだした。自分から断ることでできず、Th.に言葉にしてもらうのを待っているようだった。その背景には、自分の感情を優先することへの罪悪感と、Th.と一緒にやりたいと言われたら断れるか、もしくは、期待に応えないことで関係性が壊れてしまわないかという不安があるように思われた。66回目に夏休みの計画を尋ねると「一人で買い物に行って好きなCDを買う」と初めての挑戦とその緊張について話す。以前から犬が好きなことが話題になっていたため、69回目にTh.が犬の本を準備する。この日の交換ノートには、デジカメで色々な犬の写真を撮り始めたことが書かれており、現実世界と面接室での遊びがリンクしている感じを受ける。面接室では、本を見てA子がシールで犬を作り(図2)、Th.が犬種を当てる遊びが始まる。この遊びは最後の112回まで続く。

70回目では、A子が出すヒントが増えく小さい犬?><毛は長い?>等とTh.が尋ね、A子に答えてもらうやり取りが続く。73回目になると、Th.が訊ねなくてもヒントを出してくれることもあり、74回目では「散歩でもよく見る」とA子の日常生活をヒントに含めるようになる。これまで、Th.はA子と過ごす時間は常にA子のことで心の中がいっぱいであったが、A子の気持ち以外のことも心の中に浮かぶようになった。この頃から、Th.は常にA子が何を感じているのかを推し量り話し掛けるのではなく、自然に会話ができていてることを感じられるようになった。こうしたTh.の変化に対してA子から不安や不快な様子を見て取れることはなく、Th.とA子の間に心理的な分離が始まったように思われた。73回目の交換ノートには漫画の話が書かれていた。学校で起こったウサギの事件を漫画にしたもので、次の回にできあがったものを持ってくる。75回目には漫画の主人公になったウサギについて話をする。

ケガをしたウサギは仲間の元に戻れなくなった話、A子のおばあちゃんの家で飼われていた黒ウサギが急に亡くなりショックだった話と続いた。76回目には学校のウサギが死んでしまったことがノートに書かれており、「亡くなったウサギの様子を一緒に見たい」と埋葬前に撮った動画を持ってくる。さらに、次の回にはウサギの漫画の続きを持ってくる。Th.は<新しく生まれ変わるといいなっていうA子の気持ちがすごく伝わったよ>と感想を伝える。78回目にA子の希望でTh.が昔飼っていた茶々丸というインコの話をする、次の回には「茶々丸の物語書けたから」と持ってくる。物語は、主人公の茶子は人気者で何でもできると思っているが、陰でピー子と茶々丸という仲間が支えてくれるというもの。面接室では、サポーターの存在と支えてもらっていることに主人公の茶子が気づくことが話題になる。交換ノートには、中学校での部活の話等新しい環境での期待と共に、現実的な不安も含まれるようになってくる。82回目ではTh.からの質問に迷ったA子が、Th.の声掛けを待つことなく「分からない」と言葉にする。84回目ではTh.の間違いに「全然違う」と強く否定し、以前のように言葉にすることをためらう様子が見られなくなっていた。交換ノートには近い将来の夢について書かれていた。92回目では、前回持ってきた漫画について、小学校卒業の心配が伝わったという感想を伝えると小さく肯く。今回はコンクールに出品するという自作の童話を持ってくる。主人公が様々な体験の中で成長をするという内容の物語は、新しいことにチャレンジしようとするA子自身の物語のように思われた。中学校での生活に不安が大きくなっているようで、95回目の交換ノートには中学校での心配が書かれていた。しかし、次の回には中学校の制服を着た写真を見せてくれ、前進への期待も感じられた。100回目には、A子の描いた絵が卒業アルバムの表紙になったと教えてくれる。家では小説を書くのに夢中になっているとのことで、102回目には出品した童話の続きを読ませてくれる。107回目の交換ノートには、童話は入選できなかったが絵本になって届くのが楽しみだと感想が書かれていた。Th.は、A子が応募者の一人であることがすごいことだと伝える。A子は自分

表1 面接経過における自己表現と愛着に関するエピソード

期	回	面接場面		自己表現	登校の様子
		遊び	愛着	Th. との関わり 母親面接より（分離・愛着をめぐるエピソード）	
第1期	1			チラッとTh.を見た後は視線を合わせない。HTPでは、指先が動かず紙がめくれないほど緊張していた。	
	2	人形		学校を作り始めるがクモを見つけて固くなる。Th.が学校の外へクモを追い出すと学校作りに戻る。	
	3			何かを探している様子にTh.が何度か声を掛けるが、応えることなく黙々と探し続けている。Th.は取り残されたような感覚になる。	登校には波があるものの、決心を着けると校門で立ち止まることがなくなる。
	4	クマのぬいぐるみ持参			3年の辛かった時、姉が入院していたので辛いことが言えなかったことを吐露する。
	6			・ピアノの練習中に大泣きし始めたA子の傍から立ち上がると「何で逃げるの」と言われる。 ・赤ちゃんの頃の写真やVTRと一緒に見て欲しがったり、抱っこをして欲しがったり、手を握って寝たりするようになる。	毎日、保健室に連絡帳を届けに行くようになる。
	10			泣きながら「ピアノは弾きたいけど弾けない、学校は行きたいけど行けない、ゲームも同じ。泣くしかないよね」と言うので「そうだね」と母親が応えると、泣きやんで「お腹すいた」と言った。	
	11	対戦ゲーム遊び		ピアノで大泣きをして今までにないほど暴れた。押えていた手を離したら抱きついてきた。母親もホッとしたら涙が出てきた。	リラックスした様子で連絡帳を出しに行ける。
	15			・ピアノに行きたい気持ちと行きたくない気持ち。行かないと、ホッとする気持ちとイヤな気持ち。全部で4つの気持ちがあると話した。 ・一人で泊まりに行っていた祖母の家に、現在は母親にも一緒に泊まって欲しがるようになった。 ・A子がピアノに行きたくないと泣く日は、自分が家を空けた日のようだと母親が振り返る。	校長室で1時間過ごし始める。
	16			<何か別のことをしたいのかな？>ときくとゲームを選んでくる。Th.がA子の気持ちを推測した声掛けをすると安心して動くことができる。	
	20			<一緒にやろうか>とTh.が声を掛けてから2人で作業に取り組む。できあがると一緒に拍手で喜び、残して帰りたいがる。	校長室で裁縫や読書をして過ごし、校長不在の日は保健室登校をしている。

第2期	24	対戦ゲーム遊び	母親に密着			
	25			終了時間が来たことに不満の表情を見せ、アンケートに“おもちゃが時間がなくてできなかった”と書く。		
	26			チェスに負け続けたA子にTh.が手心を加えると、アンケートに“今回の相談はよくなかった。”と書く。		
	28			Thから交換ノートを提案する。		
	29					
	30			笑顔でTh.からの交換ノートを読む。アンケートに“負けた～”と大きな字で書いて帰っていく。		
	34			ゲーム台に載せていたコインをひっくり返し、「きゃっ」と声を出す。		
	35			アンケート用紙に大きな文字で“勝った～”と記入。		
	36				泣くこともあるが気持ちを収めるまでの時間が短くなる。	養護の先生と話ができるようになる。
	45			引き分けのゲーム結果に、どうしても勝敗を決めたいとゲームの前から動かない。延長ゲームでA子は負けたものの、アンケートに‘今日の相談はまあまあ’と評価。	母親がパートに出ることを「いってもいいよ」と認められる。	
	46			交換ノートでTh.からデザイン遊びを提案。		母親がパートに出始めたことでいつもより1時間早く学校に行かなくてはならなくなったが頑張っている。
	47				母親がパートに出始めた。在宅時間は一人でお菓子作りをして過ごしている。	
	48	デザイン遊び	母親と適当な距離	A子が一人で服のデザインをしているが、Th.は取り残されるような感覚にならない。		
	49			Th.がA子に質問をしながら、何を作っているのか当てる遊びになる。アンケートに“今日はとっても楽しかった。またやりた～い”と記入。		
	50			母親から離れ、2人で並んで帰るようになる。		
	55					相談員から相談室で個別授業を受け始める。
	60				母親にベタベタすることがなくなり、姉と一緒にいることが増える。	卒業アルバムの写真を撮ることができる。
	61				スクールカウンセラーとの三者面談でカウンセラーの隣を選んで座り母親が驚く。	
	62			シールで犬を作り始め、A子のヒントでTh.が犬種を当てる遊びが始まる。		
	66			夏休みに「一人で買い物に行く」と初めての挑戦と不安を話す。		

第 3 期	71	デザイン遊び	母親と適当な距離		コミュニケーションは控えめだが、目に見える積極的な行動がでるようになってきた。	
	73			漫画を持参。		一人で登校することをMが提案したところ、途中までついてきてもらいたいと返事
	74			Th.とA子の間に空間ができはじめたように感じられる。		1週間おきに一人で登校を始める。
	75			漫画を持参。		
	76				交換ノートを母親に見せないことが増えた。母親も日記に書いてあることが気にならなくなる。	
	77			漫画を持参。		
	78			中学校での期待と不安を交換ノートに記述。		特別支援学級のある中学校への入学に気持ちが傾き始める。
	79			漫画を持参。		
	82			Th.の間掛けにA子から「分からない」と答える。		
	84			Th.の間違いを否定し、言葉にすることのためらう様子が見られなくなる。		
	90					中学への不安が出はじめる。
	91			漫画を持参。		先生が集まり、個別に卒業式を行う。
	92			小説を持参。		
	96					入学式に出席し、教室にも入ることができた。翌日からは相談室登校を始める。
	99					全体行事に積極的に参加。
	100					
	102			小説を持参。	迷子になったA子が、初めて母親を見つけることができた夢を見たという報告があった。	
	107			童話は落選だったが、絵本になるのが楽しみだと交換ノートに記述。		
	112			先生が変わる不安と楽しみについて交換ノートに記述。今までの作品を振り返り、力強い犬がお気に入りだと話す。		

のチャレンジに自信を感じているように見えた。終了予定の2ヶ月前に3月で研究所での面接が終わりになることを伝え、お母さんから聞いていたとの返事。111回目には手作りのお菓子を2つ持ってきて、笑いながら割れていないクッキーが母親担当者用だと言う。最終となる112回目に渡された交換ノートには、先生が変わる不安と楽しみについて書かれていた。いつもと変わりなく犬のデザイン遊びをし、最後は全てのページをめくって作品を見てから面接室を出る。待合室でくどの犬が一番気に入ってるの?と尋ねると「これ」と教えてくれる。理由を訊ねると「力強そうだから」と答える。アンケートに「長い間、ありがとうございました。とて

も楽しかったです」と書き、研究所を出て行った。

IV. 考察

A子との面接経過から、面接の方針について整理した後、A子にとって表現をすることの意味の変化と、場面緘黙のある子どもへの不安の軽減を目指した支援の効果の2点について検討する。

1. 面接の方針と経過について

場面緘黙が社交恐怖や特定恐怖、分離不安等他の不安障害との併存が見られることは先に述べた。また、治療にあたっては、場面緘黙が脆弱な自我を護

る防衛反応や対人関係の障害として捉えられていることから（矢澤，2008），非言語的・非指示的な心理療法による研究報告が多い（上野，2010；西方・野崎・玉川他，2003；山口，2008）。

本事例でA子の面接方針を検討するにあたり，幼少期から社交恐怖や母子分離不安の可能性が考えられるエピソード，さらに現在の場面緘黙や不登校の状態から，背景に強い分離不安がある可能性を考えた。さらにA子に実施したHTPでは，人物や擬人化した動物から受ける楽しそうな印象と反して，樹木画と人物画からは土台の不安定さが感じられた。また，家画ではA子が大泣きをして母親を困惑させることが多いピアノの練習場面が描かれていた。母親からも，A子の激しい泣きわめきに対する困惑と罪悪感等のエピソードが語られており，A子と母親との間に解決すべき課題があることが推察された。

一方，HTP実施の中でThがA子の世界に関心を向けていることが伝わると，次の回にぬいぐるみを持参したり，おともだちカードへの記入を求めてきたりと反応を示したことから，A子の持っている世界にThが接近していくことが関わりの糸口となることが推測された。

こうした状態のA子に対し，愛着の不安定さから生じる母子の分離不安を目指した支援を行うこと，その方法として，母子平行面接で相談を進めるという方針を立てた。また，A子へのアプローチの方法として愛着理論に着目をした。その理由は，Ainsworthらが愛着の体制化と関連する母親行動の中で最も重要な側面として，乳児のサインやコミュニケーションに対する感受性のある応答性であると述べていること（Vivien and Danya, 2008），また，Meins（1997）は母親が子どもの心的状態を読み取り，感情を適切に表現してあげることが，愛着の安定性を規定する上で重要であることだと述べていることからである。つまり，分離不安等の愛着に課題のある子どもへの心理的支援においては，信頼関係をベースとした依存が体験されることが重要だと考えられるためである。

また，山口（2008）は場面緘黙のある子どもの治療について，“一定の間隔を持つ安定した枠組みで行われるセラピストとの一対一の遊びが，言葉で感

情を表現しきれない子どもにとって内的世界を表現することができる有効な手段である”と述べている。また，Winnicott（1971）は，精神療法は患者の領域と治療者の領域が重なり合うことで成立するものであり，一緒に遊んでいる2人に関係するものであることを述べていることから，まずA子にとってThが安心して遊ぶことができる対象となることを目指した。

さらに，面接を始めた当初のA子はThからの関わりに対する反応が殆どなく，ThにとってはA子から取り残されるような空虚感が続いた。こうした状態に，A子から発せられる小さなサインを見逃さないよう，Thが感じ取ったA子の感情をできるだけ言葉にして伝えるようにした。次第に自然な会話ができるようになってきてからは，A子が好む方法でできるだけ表現の機会が増えることを意識した関わりを目指した。

2. A子にとって表現をすることの意味の変化

（1）面接室での自己表現と現実世界の変化について

面接室では前半2回目～47回目まではゲーム，その後，最後の112回目まではデザイン遊びを行った。遊び方に大きな変化はなかったものの，遊びを通したThとのコミュニケーションは徐々に変化していく様子が見られた。

1) 攻撃性や万能感を感じられる遊びへのチャレンジ

最初は，“黒ひげ危機一発”や“ゆらゆらパニック”等，順番に積み上げていったものが突然崩れるといった不測の事態が起こるゲームを好んでいたが，徐々に対戦色が強いリバーシやチェスで遊ぶ時間が長くなっていった。面接にゲームを取り入れることは攻撃性を発揮したり，万能感や対人距離の取り方を体験できたりという点で有効である。本事例では，母親に対し泣いて暴れていたA子が，ゲームという枠の中でThに攻撃性を発揮する遊びに移行していった。A子はゲームを通して，Thに負けないうという万能感と共に，攻撃を向けても対象は生き残ること（Winnicott, 1971）を体験したと言えよう。26回目になると，A子が勝ち続けていることが現実ではなく，Thが手心を加えているのではない

かと思ひ始め、脱錯覚(Winnicott, 1965)が起こっている。そして、実力で勝てるようにと家でチェスの練習するようになる。A子が現実を意識しはじめたことと、面接室と現実の世界のできごとをリンクさせながら成長をしていることが推察されるエピソードであった。

2) 表現することと共有することを楽しむ遊びへの変化

その後、面接室での遊びは、ゲームからデザイン遊びに移っていった。デザイン遊びを始めた頃のA子は、シールを貼って好きなゲームのキャラクターを作ることを楽しんでいたが、面接が進むに連れ、A子の作った作品にTh.が質問をし、作品を当てるというコミュニケーションを楽しむ遊びに変化していった。これまでのA子の気持ちを推察したTh.の関わり掛けや、対戦ゲームを通した関わりが、彼女にとって安定した関係の基盤となり、作品を作ること以上にコミュニケーションを楽しむことに結びついたと考えられる。

面接の後半になると、A子は文字での自己表現として、アンケートや交換ノートを利用するようになった。面接室での感想を伝えるため、A子が15回目からアンケートの記入をするようになったことから、Th.は伝えたい気持ちが出せる手だてを増やしたいと考え、28回目に交換ノートをすることを提案した。A子はすぐに交換ノートに応じ、最終回まで続けられたことから、文字はA子にとって自分以外の人と考えや感情を共有するための大切な手段となっていることが推察された。62回目になると“Th.と作品と一緒に作りたい”と希望をしたものの、期待していたような状態にならなかったようで、アンケートには“今日は難しかった!!”と書かれていた。Th.に直接言いにくい要求や残念な気持ちを、文字にすることで伝えられるようになり、安定した関係があれば、A子は思ったことを伝えられることを確認することができた。交換ノートの内容は、A子の好きな芸能人のことや学校での出来事等現実の話が増え、Th.と共有できることが増えていった。またTh.からの質問にも答えてくれるようになり、ノートの上でやり取りが進むようになった。

その後、学校で飼っていたウサギが死んでしまったことをきっかけに、自作の漫画をTh.に見せてくれるようになる。漫画の内容を介して、Th.が感想を述べたり、A子に質問をするようになったりと、次第に現実に対してA子が感じていることを表現する機会が増えていった。さらに、A子の思いを表すような長編小説を書きあげ、企業が主催するコンクールに出品する等、A子の表現が段々と広がっていくことには驚くばかりであった。

このように、第3期中頃には、A子とTh.が同じ「空間」で遊ぶことを楽しめているとTh.自身実感できるようになっていた。遊びが楽しめるとは、お互いの関係を信頼した上で、自分の考えや感情を表現できることと、お互いの考えや感情を調整することにつながると言える。Winnicott (1971)は“遊ぶことは成長を促進し、健康を増進する”と述べているが、A子との遊びの様子が変化するのと並行して、分離不安の軽減と母子関係の変化も確認することができた。

(2) 母親に向けた自己表現の変化

母親に向けた自己表現の変化については、母親面接で聴取したエピソードを中心に「母親への甘え」と、「泣くことと言葉にすること」について考察する。

1) 母親への甘えについて

6回目の母親面接で、A子が自分の赤ちゃんの時の写真やVTRを母親に見て欲しがったり、抱っこして欲しがったりするようになったこと、母親の手を握って寝るようになったことが報告されている。また15回目では、以前は1人で泊まりに行っていた母方祖母の家に、一緒に泊まって欲しがるようになる等、今まで母親に対して言えずにいた思いを伝え、母親に幼児期のやり直しを求めているような甘えの報告が続いた。母子並行で面接を実施していたことが、A子には母親に愛情を求めること、母親にはA子を受け止める器を作ることとなり、その相互作用が母子分離の促進に繋がったことが考えられる。

2) 泣くことと言葉にすることについて

面接開始時から何度も語られたエピソードは、母

親の側で泣いて訴えていたA子が、泣くだけでなく言葉にできるようになっていったことである。6回目では、ピアノの練習で大泣きをしているA子から離れようとする「何で逃げるの」と言葉を投げかけられたこと。10回目には、泣きながら「ピアノは弾きたいけど弾けない、学校は行きたいけど行けない、ゲームも同じ。どうしたらいい?…泣くしかないよね」と母親に訴え、「そうだね」と母親が応えると、泣きやんで「お腹すいた」と答えたことが語られている。このエピソードは、お腹の中に溜めていた混乱した感情を言葉で母親に伝えられ、その感情を抱えてもらうことができたために、やっと空腹感が感じられたように推察された。さらに、11回目では、練習中に大泣きし、今までにないほど暴れたが、母親が押えていた手を離すと抱きついてきて、母親もホッとしたら涙が出たこと。15回目では、「ピアノに行きたい気持ちと行きたくない気持ち。行かないと、ホッとする気持ちとイヤな気持ち。全部で4つの気持ちがある。」と母親に話しており、母親はA子がピアノに行きたくないと泣く日は、自分が家を空けた日のようだと振り返りがされている。面接開始からしばらくの間、泣くことはA子にとって母親に対する言葉にならない怒りや不安の感情を訴える手段のように思われたが、母親にとっては泣いている理由が分からず、結果として両者の間のコミュニケーションのズレが生じたていたことが考えられる。A子が自分の感情を言葉で伝えるようになってからは、母親の困惑が減り、A子を受けとめやすくなる。最後には「泣き暴れる」というA子から向けられる激しい感情表現に、母親が負けることも不在になることもなく、受け止めてくれる存在として機能するようになったことは、Winnicott (1971) の言う“対象が生き残ること”となり、A子が不安の軽減や愛着の安定化を図り、依存関係から自立するための重要な体験となったことが推察された。

3. 場面緘黙のある子どもへの不安の軽減を目指した支援の効果について

不安の軽減を目指した支援の効果については、「母親不在の不安軽減と分離」と「不登校との関連」

について考察する。

(1) 母親不在の不安軽減と分離について

第1回目の検査でA子の側に小さく書かれていたクマのぬいぐるみについてたずねると、いつも一緒にいる大切なぬいぐるみであることを教えてくれる。その後、2回目から13回目までこのぬいぐるみを側に置き面接室で過ごしていたことから、母親と分離し面接室でTh.と過ごすため、ぬいぐるみに安心を求めていることが推察された。Winnicott (1971) は不安、特に抑うつ不安に対する防衛として移行対象の役割について述べている。A子は愛着対象である母親不在の不安を抑えるためぬいぐるみを日常的に利用しており、このぬいぐるみが移行対象としての役割を果たしていることが推察された。面接が進み、ぬいぐるみを持参しなくなった20回目から49回目までは、母親との再会場面で抱えてもらうように密着して帰って行くようになる。

こうした経過の後、母親面接で、45回目に母親がパートに出ることを認められたこと、60回目以降は母親よりも姉と一緒にいることが増えたこと、学校の三者面談で母親ではなくスクールカウンセラーの隣を選んで座ったこと等、A子が母親から分離していく様子が語られた。76回目になると、A子がTh.との交換ノートを見せなくなったことについてあまり気にならなくなったことが語られ、母親もまたA子の成長を安心して受け入れられたようだった。102回目では、A子が母親に語ったという夢の話が報告された。その内容は、「迷子になったA子が初めてお母さんを見つけることができた。今まではお母さんが逃げてしまったり、いつまでもお母さんが見つけられなかったりという夢だった。」というものであった。A子にとって母親との関係が安定化し、分離の課題を乗り越えたと思われるような報告であった。

(2) 不登校との関連について

A子は幼児期から引っ込み思案な性格で、登園渋りがあった。元々の性格特性に加え、母子分離不安があり、さらに、担任から激しい叱責を受けたことが不登校となる大きな引き金となっていた。母親が

学校に連絡をしたことで配慮がされるようになったものの、廊下等でその担任に会うのではないかという不安が強く残り、登校前に身体症状を訴える程の緊張が続いていた。それでも、母親との分離不安が軽快していくと共に、登校の様子は異なる様相を見せるようになっていった。

教育相談を開始した頃は母親と離れ、一人で連絡帳を出しに行くことが困難であったA子が、Thとの間で、愛着の再体験をし、さらに、母親にA子が抱え続けてきた不安や怒りを受け止めてもらうといった分離体験をやり直すことが、校門で母親と別れ、校長室登校ができるようになったことに繋がったと考えられる。さらに73回目以降には、母親の付き添いなしで相談室登校ができるようになっていく。

こうした経過から、「不安の軽減」を目指した支援が、愛着の安定化に繋がり、さらに分離不安が軽減されたことで、学校がA子にとって、家以外で過ごす場として位置付くための支援にもなったと考えられる。

来所当時、A子にとって自己表現をする意味は、母親に自分の気持ちを受けとめてもらうことだったと推察される。しかし4年の経過の中、母親のみならず、Thにも自分の感情や意志を伝えられるようになり、さらに、漫画や小説といった抽象的なものに形を変えて表現するようにもなった。漫画や小説は現実には難しいことを書き表して満足を得たり、なりたい自分の姿を描き目標を立てたりと言葉を使った高度な象徴遊びと言えよう。さらに、作品を書きあげることで満足するだけでなく、書いた作品を発表し誰かに読んでもらおうとする行為は、A子にとって自分の気持ちや考えを他者と共有する機会を作ろうとするチャレンジだと考えられる。A子の表現の広がりを振り返ると、“母親”から“多くの他者”へ、“要求を伝えるもの”から“作品を通したコミュニケーションの場づくり”へ、と表現することの意味が広がっていく過程としても理解できる。

このようなA子の成長には、面接場面でのThの関わりのみならず、家庭での家族の関わり、そして学校での先生の関わりの全てが欠かせないもので

あった。母親との関わりがA子の成長に大きな役割を担っていたことは先に記した通りである。さらに、A子の家庭や学校での様子について母親から語られたことで、現実場面と面接室の経過を確認することが可能となった。学校の取り組みについては多くを記さなかったが、A子の状況に応じて「居場所」を確保し続けたり、漫画や小説を通してA子が表現することに関心を向けたりと、A子にとっての居場所としての機能を維持し続けていた。このように、相談機関・家庭・学校が連携を取りながら前進できたこともまた、A子の成長を促す大きな要因となっていたと思われる。

IV. まとめ

本事例は、母子分離による不安が背景にあることが考えられたため、母子並行面接により、A子の分離不安の軽減を目指して教育相談を実施した。4年間のプロセスを振り返り、母子分離不安の軽減を目指した支援は、場面緘黙のある子どもの不安の軽減のみならず、場面緘黙から二次的に派生した不登校への支援にも繋がることを確認できた。また、A子にとっての自己表現は、相談開始時、依存対象である母親からの愛情欲求を満たすことに大きな意味を持っていたが、次第に母親以外の他者と世界を共有する機会を広げることに意味を変化させていった。A子が本来持っていた豊かな心の世界を、他者に向けて伝えたいという気持ちになれたこと、さらに、実際に絵や文章で表現した作品を家族、友だち、学校の先生と共有できたことは大きな成果だったと言える。

V. おわりに

相談終了から4年経った現在、A子は高校生になった。大好きな犬の世話に関わる仕事に就きたいという希望を持ち、毎日登校をしているとのことである。また、絵画作品を展覧会に出品する等の活動も続けているという。面接開始当時は、泣くことで母親に向けた自己表現をすることが多かったA子が、不特定の対象に向け自己表現することを楽しめ

るまでに成長したことはとても感慨深い。これからもA子らしい自己実現に向け、歩み続けることを期待したい。

謝辞：本論文をまとめるにあたり、事例の発表をご快諾くださったA子さんと、ご両親に心より感謝し、御礼申し上げます。

引用文献

安福純子・中角正子・田中みのり・他（2009）. 不登校と保健室養護教諭の関わり. 大阪教育大学紀要 第4部門 教育科学, 58(1), 261-278.

D.W.Winnicott (1979). 遊ぶことと現実（橋本雅雄, 訳）. 岩崎学術出版社. (D.W.Winnicott (1971). *Playing and Reality*. Tavistock Publications Ltd,London.).

岩田美保・大芦治・鎌原雅彦・他（2009）. 現職教員が教育現場で現在直面している問題とスクール・カウンセラーに対するニーズに関する調査報告. 千葉大学教育学部研究紀要, 57, 103-107.

Meins, E (1997) *Security of Attachment and the Social Development of Cognition*. Hove : Psychology Press.

文部科学省（2012）. 生徒指導提要第5章, 106.

西方宏昭・野崎剛弘・玉川恵一・他（2003）. 選択性緘黙を合併した神経性食欲不振症の患者に対する非言

語的交流技法を用いた治療的介入. 心身医, 43(10), 699-706.

大井正巳・鈴木国夫・玉木英雄・他（1979）. 児童期の選択性緘黙についての一考察. 精神神経学雑誌, 81(6), 365-389.

大村豊（2006）. 選択性緘黙—成人期への影響—. 精神科治療学, 21, 249-256.

相馬壽明（1991）. 選択性緘黙の理解と治療—わが国の最新10年間の個別事例研究を中心に—. 特殊教育学研究, 29(1), 53-59.

竹内久美子（1989）. 緘黙児の自己意識. 情緒障害教育研究紀要, 8, 109-112.

角田圭子（2011）. 場面緘黙研究の概観—近年の概念と成因論—. 心理臨床学研究, 28(6), 811-821.

上野永子（2010）. 選択性緘黙症男児に対する同一セラピストによる同一平行面接過程—DWウィニコット理論からの検討—. 心理臨床学研究, 28(5), 631-642.

Vivien Prior and Danya Glaser（2008）. 愛着と愛着障害（加藤和生, 監訳）. 北大路書房. (Vivien Prior and Danya Glaser (2006). *Understanding Attachment and Attachment Disorders*. The Royal College of Psychiatrists.).

山口直子（2008）. ある場面緘黙の少女との遊戯療法—彩り豊かな作品を通じて—. 近畿大学臨床心理センター紀要, 1, 105-116.

矢澤久史（2008）. 場面緘黙児に関する研究の展開. 東海学院大学紀要, 2, 179-187.

Transformation of self-expression in children with situational mutism by supporting mother-to-child separation anxiety

ITO Yumi^{*}, UEKIDA Jun^{**}

(Department of Teacher Training and Collaborative Projects^{*}) (Miyagi University of Education^{**})

Children suffering from situational mutism do not have any problems in their ability to speak. However, in some cases, such children may not speak in social situations, including at school. The child “A” was a fourth grade elementary school pupil suffering from situational mutism, who could not be separated from her mother. In order to reduce her separation anxiety, the author conducted educational counseling for this child, continuously for four years. Parallel counseling was also conducted with her mother. The purpose of counseling was to stabilize the child’s attachment. The author encouraged the child, attempted to guess her feelings, and put those feelings into words. In the course of counseling, the relationship

between the author and “A” stabilized gradually, and the child became adapted to making self-expressions by exchanging notes and through play. Also, she became able to verbalize her feelings and the confusion that was previously expressed by crying. Furthermore, the child became able to go to school by herself, which allowed her mother to go to work. At the completion of the consultation, the child was enjoying herself by showing novels she had written and pictures she had drawn by herself to her friends and teachers.

Key Words: Educational counseling, Situational mutism, Self-expression, Anxiety, Attachment

